

書評

小村宏史著『古代神話の研究』

瀧音能之

本年二〇一二年は、『古事記』編纂一三〇〇年ということもあって、『古事記』や神話関係の書籍が書店をにぎわせているようである。あたかもその先陣をきるように、昨年九月に出版されたのが本書である。

本書は、著者である小村宏史氏が早稲田大学に提出した学位審査論文を基として、その後に表示した論文を加えて再構成して一書に成したものである。本書の構成は、「第一部 形成される神話」、「第二部 大和王権をささえる神話—『古事記』『日本書紀』の世界像—」、「第三部 地方氏族の神話—『出雲国風土記』の世界像—」の三部からなっており、そこに十二編の論文が収められている。

具体的に内容をみていくならば、第一部には、「上代文献にみえる具体的な神話記事を検討した」三本の論文が配されている。第一章「大和三山歌の神話」は、『万葉集』巻一の「一三—一五歌を考察したものである。一三歌を香具山と耳成山の二男が畝傍山という一女をめぐってツマ争いを行ったものとしてとらえ、それをうけて一四歌を香具山と耳成山が逃げたツマ（畝傍山）を追って印南までやってきたと解釈している。一五歌については通説を

ふまえ、朝鮮半島への出兵のためのヤマト軍に対する神の祝福を願ったものとしている。その上で、この一三歌から一五歌の関係を、ツマ争いという通俗的な題材の神話を使って作品世界に人々をとりこみ（一三歌）、そこから、神の移動と現実の軍の移動を重層して語り（一四歌）、遠征軍の成功を祈る主題へとつないでいく（一五歌）というようにとらえている。

第二章「ヲロチ退治神話に関する一考察」は、有名なスサノオ神のヤマタノ大蛇退治の神話が、『古事記』や、『日本書紀』にはみられるが、『出雲国風土記』にはまったく記されていないことに注目して検討を加え、オロチを水神と結論づけている。オロチを水神とする見解はひとつの考えであると思われるが、その前提として、オロチを人間説、河川説、大蛇説という先学の枠組を踏襲しているのはいささかもったいない気がする。他にまだないかという工夫があってもよいのではなからうか。しかし、この神話を「オホナムチの国譲りに先立って、出雲の信仰という精神的世界の王化を描いたもの」とし、「大和王権の国家支配の正当性を支える」神話であるとする視点は大変、興味深く基本的には評者も同意見をもっている。第一部には、これらの二編の他に、補章として「古代性を排除する王権神話」が収められており、これは第二章を補ったものである。

第二部は、『古事記』・『日本書紀』をテキストとして神話を考察しており、五編の論文が配されている。第一章『古事記』におけるスサノヲ像」は、スサノオ神が高天原から追放される以前と以後において性格が異なるという従来の説を紹介し、その理由

は異なる伝承を結合したことによるとされ、これに對して疑問を呈している。この発想はきわめて自然であり、『古事記』の編纂者たちは少しも矛盾するスサノオ像は描いていないと考える方が妥当であろう。欲をいえば、スサノオ神とはどのような性格をもった神なのか、という点を著者に聞いてみたい気がした。

第二章「妣国根之堅州国」をめぐって——「黄泉国」との関係——は、一般には死者の国と定義されがちな黄泉国と根之堅州国とについて、検討を加えたものである。その結果、「永遠に復活のない恐ろしい死をもたらしもの」が黄泉国であり、同じ死者の国でも「生まれ変わる力の根元としての世界」が根之堅州国であるとしている。第三章「『古事記』における天皇短命起源譚」はコノハナサクヤビメの伝承をテーマとして、天皇の死について論じている。「天皇といえども死を逃れることはできない」としつつ、「しかし、王権神話における天皇は、本来神格化、絶対化されてこそ当然の存在」という立場から、天皇の寿命は人々の次元とは異なるものと結論づけている。

第四章「ヤマトタケルの東征——「さねさし」歌謡に導かれる王化の要素——」は、『古事記』にみられるヤマトタケルの東征伝承を『日本書紀』とは異なる独自の構想によるものとしてとらえ、東国に対する王化の要素がみられるとしている。

第五章「イザナキ・イザナミの生成行為——陰陽二元論とのかかわり——」は、陰陽思想が導入されるとされる『日本書紀』についてイザナキ神とイザナミ神による国生みまでは陰陽二元論が貫かれているものの、それ以後は異なっているとしている。

第三部は、中央政府によってまとめられた『古事記』や『日本書紀』に對して、在地で編纂された『出雲国風土記』に注目して、そこに展開される世界を神話という視点から明らかにしようとしている。

まず、第一章「『出雲国風土記』の世界——「所造天下大神」と中央神話——」は、『出雲国風土記』の監修者ともいえるべき出雲広島が、在地に残されている伝承の中から自らの出雲国造家の世界観に合致するものを選んで記録したという説に立っている。さらに、こうした出雲国造家の世界を構築するために『古事記』や『日本書紀』もとり入れたであろうと推測している。そして、出雲国造家の意図を「令制下の出雲国を、自らの主祭神、オホナムチのもとに収斂していくことで、自家の復権を期したのであらう」と述べている。著者の発想は壮大なスケールをもち大変、興味深いものである。しかし、同時に少々、具体性に欠けるようにも思われる。というのは、「自家の復権」とは何を意味しているのかがいまひとつ明瞭でないからである。

第二章「『出雲国風土記』におけるオホナムチ像」は、第一章とも関係し、天の下造らしし大神と称されるオホナムチ神の役割について考察を加えている。ここで著者は、「出雲国造家は家門の衰微を感じると同時に、かつて国造制下で出雲一国を統べ、マツリゴトを行った過去に對して憧憬に近いものを感じていたのではないだろうか」と述べている。これが、著者のいう「自家の復権」にあたるのかもしれないが、とするならば、出雲国造の権力について改めて検討が必要になるように思われる。というのは、

国造というまでもなくヤマト政権下の地方官であり、出雲国造も例外ではない。したがって、国造制下での出雲国造については再検討が必要と思われる。また、オオナモチ神について、かつてクマノ大神を奉じていた出雲国造の姿を反映したものであると同時に、祭祀王をめざす律令制下の出雲国造の理想形を投影したものであったとして、「祀り、祀られる神」という考えを提示している。この点は、次の第三章「所_レ造天下_一大神」造形―祀り、祀られる神として―において、さらに考察が深められている。

ここでは、『出雲国風土記』にみられるオオナムチ像は、皇祖神であるアマテラス大神の性格も参考にされたと述べており、天皇と出雲国造を中央と地方という違いはあるものの相似の関係があるとしている。こうした天皇家と出雲国造家とを基本的に共通の要素をもつとする視点は興味深く、かつ有効なものといえるであろう。

第四章「『出雲国風土記』の阿遲須積高日古命神話」は、オオナムチ神の子神であるアジスキタヒコ神を「現国造のあとを継ぐ新国造の象徴として造形」された神としている。これは、オオナムチ神を出雲国造の象徴とみる著者からするならば、自然な結論ともいえるであろう。

第五章「出雲国造の求めた神話―神話テキストとしての『出雲国風土記』―」は、『出雲国風土記』を出雲国造家の「権威・神聖性を主張するための神話テキスト」であることを述べている。

以上、本書の内容をあらあら紹介し、思いつくままのコメントをつけてみた。もとより歴史学の立場に身をおく評者が本書を評する能力がないことは十分に承知している。それにもかかわらず、無謀にも筆をとったのは、本書の中の論文の多くが出雲に関するテーマを論じていたからに他ならない。出雲・神話・風土記といったテーマに興味を持っている者として、本書が大変、魅力ある書であることはいうまでもないことである。『古事記』の上巻・中巻・下巻のうち、上巻すべてが神代のことを叙述し、しかもその神代の三分の一以上が出雲に関連した神話であることの理由はいまだに解決をみない問題である。冒頭にも述べたように、『古事記』編纂一三〇〇年の高まりの中、島根県では夏から秋にかけて神話博覧会と銘打った催しが開かれ、夏には京都国立博物館で、秋には東京国立博物館でそれぞれ大規模な出雲展が開催される。こうした気運の中で、本書のような地に足の着いた新しい研究の果たす役割は大きいといえるであろう。

(二〇一一年九月 新典社 A5判 二〇三頁 税込九六六〇円)